

ポンソンビ博士の神道研究

——とくに御神魂の理解について——

照 沼 好 文

一、神道への開眼

古い歴史と伝統を持つ英国貴族の中で育まれたリチャード・ポンソンビ・フェイン Richard Arthur Brbazon Ponsonby-fane (1878-1937) 博士⁽¹⁾の教養は、日本文化に関する研究の糧になつて、博士の研究を助けたに違ひないが、一方博士が日本文化の研究を志し、日本語の習得を思立つたのは、英国における日本学者、アストン⁽²⁾の英訳『日本紀』、同じくチェンバレン⁽³⁾の英訳『古事記』などを読み、それらのもとなつた文献を直接読みたいといふ強い願望があつたからだといふ。勿論、かうした博士の願望は、やがて博士が多くの日本に関する著述を残し、かつ海外に日本文化を紹介するに至つた重要な発端となつたことは否めない。

また、ポンソンビ博士^(以下、ポ博士)の日本研究における領

域を見れば、博士は日本の理解とその文化的意義の顕揚のために、日本歴史一般及び皇室制度の研究、神道及び神社の研究、そして日本教育や日本人の日常生活に関する思索論評等にわたつて展開してゐるが、ポ博士の学問の特質は、「その全組織に於いて全き日本学の一体系を形作つてゐるものと断じてよい」と、徳重浅吉教授によつて指摘されてゐる⁽³⁾。

とくに、ポ博士の研究には、まづ『皇室譜』をはじめ、『京都史』『御陵』『皇室と神道』『神道の盛衰』或ひは『賀茂御祖神社御紀』等々枚挙に遑がないが、博士晩年の五、六年は全国の神社、神道研究に没頭され、その成果も一一〇余篇の論文となつて発表されてゐる。ともあれ、このやうなポ博士の神道、神社に関する研究の中から、とくに宗教としての神道の捉へ方、また神道信仰の核となる御霊の理解についてアプローチしてみようと思つてゐる。

二、宗教としての神道について

さて、明治以来、外国人の接した日本民族固有の神道について⁽⁵⁾の見方は、さまざまであつたと思ふ。例へばチェンバレン教授は『日本事物誌』⁽⁶⁾の中に、

神道はしばしば宗教として言及されているが、今日その公式代弁者を勤め、それを愛国的制度として維持しようとする人びとの意見においてすらも、その名〔宗教〕に値する資格がほとんどない。神道には、まとまつた教義もなければ、神聖なる本〔聖書・教典の類〕も、道徳規約^{モラル・コード}もない。道徳規約が欠如している理由は、この国の解説者たちの書いたものによれば、日本人の人間性が先天的に完璧であるからであつて、そのような外観的な支柱を必要とせぬからであるという。

と述べてゐるが、神道にとつてはかなり厳しい批判的な眼で観察されてゐる。

だが、このやうな神道の見方に対して、ポ博士の場合、どのやうな神道の捉へ方をしてゐるだらうか。

まづ、ポ博士は『神道の盛衰』⁽⁷⁾の中に、「神道は宗教である」⁽⁸⁾とはつきりと断言してゐる。その上で、ポ博士は、神道は宗教に非ずといふ内務省の公式見解にも拘わら

ず、「宗教」の語を使用してゐる。私の考へでは、神道は最も活力に富む宗教であり、かつ非常な生命力を持つ宗教である。(原、英文。引用文の和訳は略号、以下同)

と、神道の宗教性を強調してゐる。

また、このポ博士の神道観に対して、比較宗教学の泰斗、加藤玄智博士は、

〔ポ博士は〕神道は宗教である。ただ宗教であるといふだけでなく、非常な生命力を持つ宗教であると、力強くはつきり宣言された。この点、ポ博士と私とは全く同じ結論に達した。しかし、私たちは神道であるといふ同一の結論であるけれども、両者の立場は異なつてゐる。私の立場はあくまでも、比較宗教学の立場からそのやうに主張してゐる。(原、英文)

と、比較宗教学の立場から「神道は宗教である」ことを強調されてゐる。

ここで、ポ博士の神道研究或ひは神道宗教説の成立過程をみていくと、徳重浅吉教授はポ博士の学問の背景、或ひは神道宗教説の成立の背景について考察を試み、次のやうに述べてゐる。

加之、(ポ)氏はまた単なる科学的方法の適用ではない。古代諸民族の精神生活を研究するに当たりては、後世の開明した民族の精神生活、従つてこれを素材として

立てられたる学問研究の思索方法は、之をそのまま用ひることが出来ぬ部面のあることをよく／＼知つてゐられたのである。之には比較的夙くから英国に発達した未開民族の社会と宗教との研究、即ち人類学や民俗学の数多い報告や著述に対する研究が暗黙の間に影響を与へたことであらう。⁽¹⁰⁾云

而して、民俗学的考察を加味せる古代史研究の上に立つて、日本の神社を調べ、その上に日本本来の民俗信仰としての神道を把握せんと試みた人だけに、氏は常に神道は宗教なりといふ立場を堅持し、その上に万世一系の皇室を天津日嗣の御位の宿りまするところとして戴きまつてゐる。日本国道の本質をも理解せんとしてゐられた。⁽¹¹⁾云

結局、徳重教授の指摘に拠れば、ポ博士の神道宗教に対する理解は、「英国に発達した未開民族の社会と宗教との研究、即ち人類学や民俗学」的な教養を活用し、かつ「民俗学的考察を加味せる古代史研究の上に立つて、日本の神社を調べ、その上に日本本来の民俗信仰」、所謂国民的宗教としての神道を把握しようとしたことがわかる。

かくして、神道の顕著な特色として、とくにポ博士はつぎの点を強調してゐる。

(一)、神道は極めて寛容性に富み、外国のやうに宗教上の

迫害がなかつたこと。

(二)、神道は清浄性、潔白性を尚び、そしてその所作慣習が、正しく伝承されてゐる。

(三)、古来、日本においては国家と宗教とが一致して、天皇は最高の祭司であらせられた。

以上のうち、神道の顕著な特色として、ポ博士が最も強調されたのは、(二)の「神道の清浄性、潔白性」である。即ち、ポ博士は、

間違ひなく、神道の特色として、最も際立つのは清浄性である。古代における全ての古典の中では、この徳義が、最も強調されてゐる。また、原初の信仰形態の中で、最も重要な教義が、この清浄性によつて形成されてゐる点は疑ふ余地はない。私は屢々、仏教から得た恩恵については耳にするが、神道の徳義については殆ど言はれてゐない。神道の称賛すべき特質である清浄性、潔白性は間違ひなく、固有の信仰の産物である。⁽¹²⁾

と述べてゐる。このやうに、ポ博士は神道の教義として、清浄性、潔白性が最も大切な徳義であることを指摘してゐる。

三、神道神学と神典研究

ところで、冒頭にチェンバレン教授の神道についての

見方を紹介したが、とくにその中で、「神道には、まともつた教義もなければ、神聖なる本（聖書・經典の類）も、道徳規約もない」と、チエ教授は一見神道に対して、未開種族の自然崇拜を連想させるやうな印象を与へてゐる。しかし、かうしたチエ教授の神道についての見方とは対照的に、ポ博士は宗教としての神道に欠かせぬものを常に論究してゐる。

例へば、ポ博士は神道における「宗教としての、則ち信仰構造の本質としての神靈」を把握するためには、当然神道神学の援助に頼る必要を感じ、その神学の基礎となる神典研究に注目しなければならぬ。つまり、宗教としての神道の考察には、神道の信仰、教義を十分理解することの大切さを、ポ博士は強調してゐるが、そのために、まづ「神道の神典として尊重すべきものは、古事記、日本書紀、古語拾遺、旧事紀、神詞等の古典である」ことを述べてゐる。さらに、これらの神典を理解するために、「偉大な国学者、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤らの大部の学問的な註釈書」を案内書として、学ぶべきことを解説してゐる。

このやうに、ポ博士は宗教としての神道には、神道神学、その基本となる神典、或ひは神典研究などに言及してゐる。且又、博士は、神道神学の成立、神典研究の發達に注目して、外来の神学に染まらぬ純粹神道は、真摯に母国の文献

研究に専念した和学者によつて展開されるまで、一定の神学はなかつた。水戸黄門（光圀）の『大日本史』編さんは、古代史研究の動機づけの役を務め、また荷田春満は神道に注意を注いだ先駆的人物であつた。彼のあとを賀茂真淵が継承し、真淵に学んだ本居宣長は、一般に卓抜の神道神学者と目された。彼の『古事記伝』全四四巻は、定評ある古事記の一大註釈書である。徳川時代の末期には、宣長の没後の門人平田篤胤、宣長の学説に反対の意見を躊躇なく発表した橋守部、伴信友らが活躍した。

と解説してゐる。

因みに、以上のポ博士の論説を一層理解し、且深めるために、村岡典嗣教授の論文を参考すれば、教授は神道神学或ひは神典研究の發達について、宣長の『古事記伝』の大成は、「その後の神典研究に動かぬ礎をおいた」と指摘してゐる。そして、かう述べてゐる。

斯の如き古来の神典研究にして、若、何等か哲学的もしくは神学的と称するに足る思想を、多少とも自発的に生み出したものがありとせば、…近世、殊に、文献学的研究後の發達、即ち普通復古神道もしくは古学神道と称せらるゝものに、之を見るのであつた。

と。即ち、田中初夫氏の言葉を借りれば、従来、神道の

神学は、所謂近世の「国学の系統に基づく学問的知識」が主流となり、「神とその古典研究解釈の上に」成立してゐることを端的に述べてゐる。このやうにみえてくると、さきのポ博士の言葉に広がりと思ひを覚える。

四、神典について

次いで、ポ博士は神道神学をしてその基本となる神典に言及されてゐるので、これに注目してみると、ポ博士は「御神魂及び広田神社」⁽²¹⁾といふ論文の中に、

この論文の主目的である広田神社史の研究に取掛かるまへに、簡単に神道神学について言及し、御神魂について多少の解説を試みる必要がある。これには特に古事記、日本書紀そして古語拾遺の三典の援助を待たねばならぬ。また、これらを神道神典と呼ぶに適はしいと思ふし、私はこの三典を神典として扱ふつもりである。

と述べてゐる。とくに以上に述べれば、博士は記、紀、古語拾遺の三典についての解説と、その三典尊重の意味を述べてゐる。

まづ、記、紀に関して、

私は、記、紀、古語拾遺の文献を神典として記述してゐるが、記、紀二典は宗教的な目的をもつて編纂され

た古典ではなく、ただ国史を編述した史書であつたといふことを心に銘記して置かねばならぬ。

おそらく、この二典はサムエル記(旧約聖書中の上二巻。Samuel)、土師記(旧約聖書中の一書。Judges)、列王紀(旧約聖書中の一書。Kings)、そして歴代志(旧約聖書中の上下二巻。Chronicles)等の聖典に酷似してゐるやうに思はれるが、全体として、記紀はキリスト教の聖典、マホメットのコーラン、仏教の経典等と同視することはできない。記紀二典には史実が述べられ、また様々な物語から抽出された道德以外に、宗教的教義のやうなものも含まれてゐない。⁽²²⁾

と、このやうに他宗教における聖典と比較して、記紀の性格を明らかにしてゐる。このほかにも、記紀、或ひはその他の古典について解説してゐるが、ポ博士はとりわけ神典中、古語拾遺を尊重して、同書の解説に力点を置いてゐる。

古語拾遺はかなり後代の書であり、全く短篇の書である。本書の目的は完全な史書を目指すことではなく、ただ忌部氏の確かな正当性と特権を訴へることの潔白さを証明するために、過去の出来事を述べてゐるだけである。従つて、本書は一種の特別な訴牒であるので、ともすれば疑ひの眼をもつて傍観されがちである。しかし、いま私たちの身辺にある当時の神道信仰に関する

る資料のなかでは、本書が最も貴重な存在であるやうに思はれる。^六

確かに、本書の所見には、原初の信仰と相違する点はあるだらうが、平安時代の初期に、彼らは最も純粹な心をもつて、神道信仰について偽りのない姿を本書に描いてゐる。従つて、本書は神典として、十分採用できると思ふ。⁽²³⁾

即ち、ポ博士は、古語拾遺には記紀二典に窺はれない当時の神道思想が反映され、かつ宗教としての神道信仰の形態が発見されるとして、特に本書を神典として尊重する所以を披瀝してゐる。

五、神魂についての理解

(一) 神魂の語義

さて、宮地直一博士は、「神社概説」⁽²⁴⁾中に、神社の要素の明確化は、「先づ第一に而かも最も重要な事項」であるとして、その祭神について解説されてゐる。それに拠れば、祭神は神社の主体をなすもので、実に第一要素である。祭神として神祇を奉祀するにあたり、その神々の御魂全部を奉祀する場合と、和魂又は荒魂等その一部を奉祀する場合とがあるが、後世にはその区別を立てるも

のは極めて稀である。

と、神社神道における祭神について解説されてゐる。

しかし、実際にこの祭神の所謂神魂の理解については、神道を信奉する日本人も、とくに宗教を異にする西洋人とつても、最も難しい問題であることを、ポ博士は述べてゐる。

恐らく、神道神学において最も困難な問題は、ミタマの語義とその特質についての把握である。⁽²⁵⁾

また、とくに両者の間における信奉する宗教によつて、神魂の理解に相違のあることを指摘してゐる。

数多い神魂は神々の所有の物と認めてゐる日本人は、完全に神人同格説によつて導かれ、また彼らが人間として彼ら自身が所有してゐるものを、ただ神々に宛がつてゐるだけであることを、最初に理解すべきである。西洋人である私たちは、肉体に加へて靈魂があると意識してゐる。ある意味で、これは二重性である。⁽²⁶⁾

このやうに、宗教の相違によつても、神魂理解の難しさを述べてゐるが、さらにポ博士は神典に出てくる神魂について解説してゐる。

即ち、神典中の四種の神魂―和魂、荒魂、幸魂、奇魂を挙げてゐる。この四神魂のうち、幸魂、奇魂は古事記に記載がなく、書紀はただ一ヶ所だけ記載してゐると、書紀神

代上の大己貴神と大三輪の神との対話を示してゐる。⁽²⁷⁾

他方、書記神功皇后卷の「住吉の御誨」⁽²⁸⁾に見える和魂、荒魂についての語義を説明してゐる。

その説明に拠れば、

語源的に、和の意味は難解ではなく、平和な *pacetidi* 或ひは平靜な *tranquil* という意味があるが、一方の荒の語には種々の説があり、かなり論議されてゐることは確かである。従つて、採用される語義の如何で、荒魂の性格或ひはその概念が違つて導かれ、重大な問題がある。⁽²⁹⁾

とポ博士は説明してゐるが、次いで松岡静雄編の『日本語大辞典』から「荒」の語釈を紹介してゐる。その主要な部分をみれば、

粗野な *rough* 或ひは無造作な *rude* という意味の荒の文字は、悪事 *bad* 或ひは狂暴 *violent* といふ悪(ワル)から派生してゐるといふが、神々に悪意があり、殊に邪悪な心を表はした言葉の用例は古文中、どこにも見あたらないので、荒は現はれる *to appear* 或ひは、外形に現はれる *to make manifest* といふ意味を表はす現の字を用ゐるべきである。荒は荒魂が恐怖を伴ふ怨霊に考へられる至つた時に登場した転訛語であり、語源的に荒魂の語には表面に行動を示す御霊 *the*

spirit made manifest といふ意味以外の意味は見当たらない。⁽³⁰⁾

と、ポ博士は松岡説を紹介してゐる。また、橘守部の独創的見解として、「荒」の音声によつて読解すべきであり、*アラハレ* 顯、生といふ二つの文字によつて表記できると思ふ。顯は現^{アラハレ}や「生立ち」*to be born* といふ意の生^{ウマレル}と同義語である。結局、守部の「荒魂」の語義には表面に行動を示す神魂の意味以外に意味が見当たらないと、博士は紹介してゐる。⁽³¹⁾

なほ、ポ博士は日本武尊の「吾は現人神の子」⁽³²⁾（岩波文庫本「日本書紀」一巻第九頁）と「住吉之現人神」⁽³³⁾との両語句を引用して、「現人神」「荒人神」の語義を解説してゐるが、さらに「和荒に、種々の意あり」と、宣長が多くの用例を『古事記伝』に挙げてゐるので、博士はこれを丹念に英訳してゐる。⁽³⁴⁾

(二) 神魂の性格

次いで、ポ博士は神魂の性格について考察を展開してゐるが、この神魂の問題がいかに難しい課題であつたかについては、賀茂真淵の例を挙げて、

真淵は、伊勢の内宮は天照大御神の和魂であり、他方実際に食物の神、豊宇気比売神を奉祀する外宮は、天照大御神の荒魂であると驚くべき解説をしてゐる。こ

れは徳川初期の学者たちが、いかに昏迷したかを物語つてゐる。⁽³⁴⁾

かくて、ポ博士はとくに宣長の神魂についての解説を紹介し、かつこれを手掛りに神魂の性格の考察に入つてゐる。最初に、宣長の神魂説について、

まづ第一に、本居は一柱の神には四種の分離する神魂を保有するが、四種の神魂は単一の神体であり、神魂はもとの神体の形体化されたものに過ぎないと主張してゐる。⁽³⁵⁾

と、博士は宣長説に注目してゐる。さらに、以上の一神魂説四神魂説を説明するために、宣長は火の譬を採用してゐるので、博士はこれに注目してゐる。

まづ、一つの火から燭や薪にも、燃移^{もえうつ}つて火となる。この燭や薪の火は、もとの火の光や熱を発し、もとの火の熱や光を減少することなくもとの火の熱や光は保たれてゐる。全体^{スベテ}の神魂説は本の火であり、四魂は本の火が燭や薪に燃移つた火と同じで、全体の神魂説が分れた神魂である。即ち、全体の神魂説の御霊³⁶である。

他方、平田篤胤もまた、以上の宣長説を『古史伝』に祖述してゐる。とくに、宣長の「荒御魂、和御魂」の解説を引用して、

さて神の御霊を、此^二ニ^一ニ^一対^へ言^はは、たゞ其徳用^{ハタケヨキ}を云

にこそあれ、全体^{スベテ}の御霊は御霊にして、必ずしも此^二ニ^一に^一分れる外無^{オホキ}には非³⁷ず。

と述べ、さらに篤胤は『古史伝』に「幸魂、奇魂」について、

師云此は共に和魂^{ニギミタマ}の名にて、幸奇^{サキウ}とは、其ノ徳用^{ハタケヨキ}を云なり。二魂^{フタミタマ}には非³⁸ず。…其ノ故は、若^{モシ}二ツの魂^{ミタマ}ならば、二神^{アラハレ}と現れ給ふべきに、今^{アラハレ}現たまふ神は一柱なり。

と宣長説を祖述し、師説に賛成してゐる。かうした宣長、篤胤の神魂説は、その後の研究に大きな手掛かりになつてゐることは云ふまでもない。

しかし、ポ博士はとくに加藤玄智博士の説を、宣長、篤胤らの神魂説に対峙して取挙げてゐる。加藤博士の神魂説を要約すれば、⁽³⁹⁾

(一)、四魂即ち和魂荒魂幸魂奇魂について、古代人の理解では遠く及ばないとする宣長説とは正反対である。

(二)、日本人は全ての神毎に、また実際に人毎に、四魂を保有してゐると信じてゐた。

(三)、この四魂はジョーンズ Jones、ブラウン Brown、スミス Smith、ロビンソン Robinson と同じやうに、本の御霊から分れた実体であり、一つの神魂は他の場面で行動した。そして、それらはキリスト教神学の三位一体説 the Holy Trinity に一致しなう。

と加藤博士は主張してゐるが、ポ博士に拠れば、さらに博士は『神道—日本の国民的宗教』の中に、書紀の神代上第八段の大己貴神と大三輪神との会話を引用し、それを解説して、

彼はオホナムチの神即ちオホナモチの神は実際に、彼の分身 alter ego の幸魂と奇魂とが会話を交はしてゐることを指摘し、かつその会話に関係してゐる幸魂、奇魂はそれぞれ一柱の神体であるに違ひないと主張してゐる。⁽⁴⁰⁾

と、ポ博士は加藤説に注目してゐる。即ち、宣長・篤胤の所謂幸魂、奇魂は「二魂に非ず」とふ説に対峙してゐるのがわかる。

他方、ポ博士はとくに和魂、荒魂の機能について言及してゐる。博士はまづ、「荒魂の活動範囲に関する合意はなく、一般に原初の信仰はかなりの変化を蒙つてゐる」⁽⁴¹⁾と述べ、「大部分の人は、和魂、荒魂の語を前者を後者に對比して用ゐてゐる」と述べてゐるが、ここでは、とくに加藤博士独自の見解を紹介してゐるので、これを見てみよう。

即ち、

明らかに加藤は、和魂の機能を広範囲に認め、かつ全て健全な建設的性格の活動は和魂によるものと考へ、また荒魂の機能は本質的に破壊的なものであることを

強調してゐるが、彼は未開の地域或ひは地方を、開明の社会へ改良する機能が荒魂の作用に十分あることを、積極的に認めようと努めてゐる。そして、彼は荒魂の領域内に、懲罰的なものを全てを含めると同様に、攻撃的な敵対心、地震颱風などのやうなもの全てを包含してゐる。また、荒と和との機能の顕著な相違を強調し、前者の荒に関する限り、「現はれる」といふ語義はないと、これを否定してゐる。⁽⁴³⁾

(三) ポ博士の把握

かくて、以上みてきた神道における神魂の解釈を総括して、ポ博士は博士自身の所見を披瀝してゐる。つぎに、その主要な部分を整理して掲げよう。⁽⁴⁴⁾

現在、過去の幾世紀の間に、鎮めるの語が和魂に連繋してゐる。それと同時に、荒魂には崇、呪或ひは罰などの語が連想されることは少しも疑ふ余地がない。即ち、荒魂は慰められる神魂であるが、元来これは、その活動の一側面にすぎないと私は信じてゐる。

換言すれば、荒魂は罪を犯す神魂であると同時に、慈善を行なふ神魂であり、率直に活動的な神魂、つまりある事業を實行する神魂であつたと信ずる。例へば、大国主神と少名毘古那命とによる農業の改良と促

進、建御雷神による天孫降臨に先立つ国土の平定、神典に記録されてゐる事業全体、また様々な地域の開発、—例えば大山咋神による丹後国の開発など。要するに、全ての活動は、それに関係した神々の荒魂に帰するものと、当然信ずべきであると思ふ。なほ、罰は荒魂の活動の範疇に入つてくるし、荒魂の作用である。

結局、多くの荒魂の慈善的行為は忘れられがちであり、却つて荒魂は執念深い神魂といふことだけを連想させ、自然に恐怖や畏怖の感情をもつて見られるに至つた。激しい男性的な素戔鳴尊の性格における明らか
な矛盾を解説した篤胤は、素戔鳴尊の稲田姫救済、即ち尊の慈善の行動は、尊の和魂が優勢であつたときに行はれ、御姉天照大御神に対する粗暴な振舞ひは、尊の荒魂の影響下で行はれたと説明してゐるが、これは以上に私が言及したことを示唆してゐると思ふ。

畢竟、ポ博士における神魂の理解は、概ね加藤博士の見解を祖述してゐるやうに思はれるが、つぎのやうな点が、とくに注目される。即ち、

(一)、従来、荒魂の慈善的行為は忘れられがちで、恐怖や畏怖の感情でみられてゐた。

(二)、この荒魂は、罪を犯す神魂であると同様に、慈善を行ふ神魂である。

(三)、また、活動的神魂、即ち事業を實行する神魂である。なほ、以上には追加する必要の点も多いが、これは他日に譲りたい。

六、まとめ

嘗て、加藤玄智博士は、「本尊美の日本研究と其人格」といふ文章の中に、

翁は曾て英国の *The Journal of the Royal Anthropological Institute* (Vol. IX, 1931) に論文を出された事があるが、其の文に於て翁は、日本当局者は神社を宗教と見てゐないが、自分は宗教と断言すると書いた。これは予が宗教学上の研究から達した研究結果と合致するので、私は知己を得たことを嬉しく感ずると同時に、翁が自己を信ずる所を、赤裸々に怯めず臆せず發表して憚らない性質を愉快に思つた。

と、ポ博士が「自己の信ずる所」を憚らず貫いた所謂信念の人であつたことを伝へてゐるが、特にこの英国、『王室人類学会々誌』に、ポ博士が發表した神道研究は、今回拙稿の基本的な資料として援用させて頂いた。とりわけ、このポ博士の論文中に、博士は「宗教としての神道」の体系づけのために、神道神学、神道の神典学の定着を考へ、宗教に不可欠の神、神御霊の研究、そして神道の教義及び

は信仰形態を闡明しようと努めてゐる姿勢が窺はれた。

それにしても従来、ポ博士の神社、神道の研究に言及した論文等あまり見掛けることがなかつた。さうした中で計らずも、新村出博士がポ博士の学問について述べてゐる一文があるので、それを紹介すると、

ポンソソビ翁の特色は、神社および神祇の考証に存するかと思はれるが、^(略中)私は翁がその文献考証と実地踏査との両方面から推し進んで、ひたすら帰納的な研究法を以て徐ろに帰結にたどりゆき、穩健な英国風の実証学風を示されたことを常に尊敬して止まなかつた。

神社神祇に関する外、民間信仰に関連する調査を試み、また皇都の沿革、宮殿の変遷、朝儀の故実などについても、或は洋人未踏の地を開拓せんとする概を示した⁽⁴⁶⁾。と、ポ博士の学問について語つてゐるが、ポ博士が「洋人未踏」の日本学を開拓しようとした先駆者であつたことは特筆に価する。

さらに、この新村博士の言葉を敷衍して、ポ博士の神社、神道に関する考証に注目してみれば、概ね博士の晩年に集めてゐる。とくに、昭和八年に熱田神宮史を脱稿して以来、満五ヶ年間に全国の官国幣社を初め、諸神社に関する一般的研究に専念して、凡そ数十篇の論文を起稿してゐるといふ⁽⁴⁷⁾。

ポ博士と親交の篤かつた加藤清氏に拠れば、

翁執筆に際して記述の正確を期せんが為めに、各神社を順次参拝して官司神官又は土地の古老より、神社の祭神及び縁起を訊し、更に之を幾多の古典に対比し、凡ゆる論説と伝説とを究め、然る後最も信頼すべき典拠に基きて、翁自身の断案を下したるその用意周到なる態度に至りては、恐らく斯道の専門家すら一籌を輪したること、信ずる。^(略中)故に翁の記述は、単に微に入り細を穿つて余すところのみならず、実に正確そのものである。例へば神社造営物の叙述に当り、丈尺寸分の尺度は勿論、何々帝の御宇何年何月何日の建立又は再建と記せらるゝが常である⁽⁴⁸⁾。

と、その記述の正確さと、研究態度の真摯さを余すところなく述べてゐる。

結局、加藤玄智博士は、ポ博士の神道研究を総括して、かう述べてゐる⁽⁴⁹⁾。

日本の神道学者としては、平田篤胤翁あり、本居宣長翁あり、更に伴信友翁もあるが、平田は華やかな筆を以つて優り、本居は真面目にして而も尊皇精神の基調に立つた信仰があるのに対し、信友の研究考証には、他の追隨を許さぬ精確微密な史的考証がある、誠に地味な考証の誠実さがある。是等三大人に比べると本尊

美翁には平田の華やかさはないが、信仰的な性質に於て本居翁に比すべく、其の考証学風に於て伴信友大人に一脈相通する其の真面目があると思ふ。この点で本尊美翁は、外人の神道研究家中、決して他の追隨を許さない第一人者であつたと思ふ。

註

- (1) 「本尊美利茶翁略伝」〔本尊美翁追悼録一「追悼録」編〕に拠れば、ポ博士は英国貴族の出身、父ジョン・ヘンリー・ボンソ、母フロレンスの嫡子として、わが明治十一年（一八七八）一月八日ロンドン・イースト・テラスに生まる。もともと、ボンソン家は英国の非常な旧家で、先祖のボンソンがボンソソンの莊園を領したのが、一七七年頃、即ちわが治承元年前後で、今より凡そ八百数十年前と云われる。また、松本一郎氏の「プリンプトンハウス訪問記」に拠れば、その本邸の建物はいづれも古く、新しいものでもわが桃山時代に相当し、最も古いものに至つては鎌倉時代初期に溯るといふ。
- (2) 『本尊美翁追悼録』（以下「追悼録」）二四八頁、並に「ボンソソソニ略伝」（佐藤芳二郎著）八頁。
- (3) 徳重浅吉教授「本尊美氏の学問について」（『追悼録』所収）二〇三頁。
- (4) 『追悼録』所収「本尊美翁著作論老年表」（五三七頁）参照。安津素彦博士の「外国人の見た神道」（『明治神道百年史』第二巻所収）、参照。
- (5) 東洋文庫チシバケン蔵バレン訳著『日本事物誌』2（昭和五一年五月一〇日）所収「神道」一九六頁。
- (6) 『The Vistas of Shinto』, Dr. Richard Ponsonby Fane Series, Vol. V, published by The Ponsonby Memorial Society, 1963.
- (7) なほ、ポ博士の解説に拠れば、本書は初め、内務省神社局監修のもとに発行された『神道講座』に執筆したが、その後英文に改稿して、英国、『王室人類学会々誌』に一九三一年発表した旨が附記されてゐる。
- (8) 前掲書、一頁。
- (9) 日本政治・外交史の権威者、栗原健博士は國學院大學學生時代に、加藤玄智博士の神道講座を受講した時の話を、生前よくされてゐた。とくに、加藤博士は神道講座、第一日目の授業の折、教壇に立つや否や、黒板に“Shinto is the National Religion”と大書されたのを今もはっきり覚えてゐると申されたのを想出す。
- (10) 『追悼録』所収「本尊美氏の学問について」、一九九頁。前掲同、二〇二頁。
- (11) 『神道の盛衰』（英文）、三頁。
- (12) 前掲註（6）、参照。
- (13) 『神道とは何か——概念規定をめぐる諸問題』、二八頁。取田中初夫氏「神霊の系譜」、二八頁。
- (14) 因みに、加藤玄智博士は「神道神学」の語に対して「神道信仰論」の語を提唱されてゐる。即ち、「神道研究界に於て時々耳にする言葉だが神道神学の語である。神学と云へば英語で Theology で此語は基督教の欧州輸入以来今日に至る迄基督教を学問的に研究した知識体系を呼
- (15)

ぶ言葉として専用されて今日に至つて居る。：故に基督教と余程性質の異つて居る神道と云う宗教の研究的知识体系に此語を借り来たることは言葉の連想上ピツタリ行かないところがある。：私は神道のかゝる研究的知識体系を呼ぶに日本語では、神道信仰論を以てし、英語では Shinto Pstology と称したらよからうと私は思う。此英語は欧州で始めて宗教学が比較宗教学の名を以て世に現われた頃学者が色々の専門語を提案した中の一つの語であつた。然し此語は広く学界に用いられないで止み宗教学即ち the Science of Religion の語が抬頭し来たり遂に是を専門語として広く用いられるに至り今日では Pstology の語は殆ど学界から棚上げされ忘れられて仕舞つた趣きがある。：（加藤博士著「神道信仰論の語彙」三五頁、所）

- (16) 『本尊美博士著作選集』(英文以下著) 第一卷所収「皇室と神道」一二頁。
- (17) 『神道の盛衰』、三七頁—三八頁。
- (18) 村岡典嗣著『増補日本思想史研究』(昭和十八年五月三日店) 所収「復古神道に於ける幽冥観の変遷」、二九〇頁。
- (19) 同上、二九一頁—二九二頁。
- (20) 前掲註(14)、参照。
- (21) 『著作選集』第五卷所収「Divine Sprits of Shinto and Hirota Jinja」三四頁。
- (22) —(23)、前掲同書、三六頁。
- (24) 『神道講座』第一卷『神社篇』(新装版、神道研究会編) 所収、一三三頁。
- (25) —(26) —(27)、前掲註(21) 同書、四一頁。なほ、大己貴神と大三輪神との対話は、『日本書紀』神代上、第八段参照。

- (28) 岩波文庫本『日本書紀』(二) (岩波七訂版) 卷第九、一四六頁。
- (29) 『御神魂及広田神社』(前掲註(21) 同)、四三頁。
- (30) 前掲同書、四二頁。
- (31) 前掲同。
- (32) 前掲同。
- (33) 『古事記伝』第二(明治四四年四月一日館)、一八四七頁。
- (34) 前掲「御神魂及広田神社」、四五頁。
- (35) 前掲同書、四三頁。因みに、F・H・ロス博士は、『神道、日本道』(Shinto, The Way of Japan, Boston: Beacon Press, 1965) の中に、「明らかに、古代の日本人は四種の魂、霊を信じていた。即ち、(一) 荒魂 rough or violent soul (二) 和魂 quiet tranquil, or mature soul (三) 幸魂 luck spirit (四) 奇魂 mysterious, awesome or wondrous spirit である。これらの言葉には、多くの意味が示されてゐるが、一として定着した解釈はない。」(三九頁) と述べてゐる。
- (36) 前掲「御神魂及広田神社」、四三頁。なほ、宣長の「火の譬」は「古事記伝」第二、一八四八頁参照のこと。
- (37) 『古史伝』(京大風土集、第一卷、名著) 三四九頁。
- (38) 前掲同書、四二二頁。
- (39) 前掲「御神魂及広田神社」、四五頁。
- (40) 前掲同書、四五頁—四六頁。
- (41) —(42) 前掲同書、四七頁—四八頁。
- (43) 前掲同書、五〇頁。
- (44) 前掲同書、四九頁—五〇頁。
- (45) 『追悼録』所収、一三三頁。

(46) 前掲同書、一六八頁。

(47)、(48) 前掲同書、一三七頁―一三八頁。

(49) 前掲同書、一三四頁。

(亥六月二十日稿了)

(元水府明德会彰考館副館長)